

## 西北ベトナムの盆地世界（資料）

樫永真佐夫<sup>1</sup>（国立民族学博物館）

### 1. ベトナムの地理・人口・民族的概要

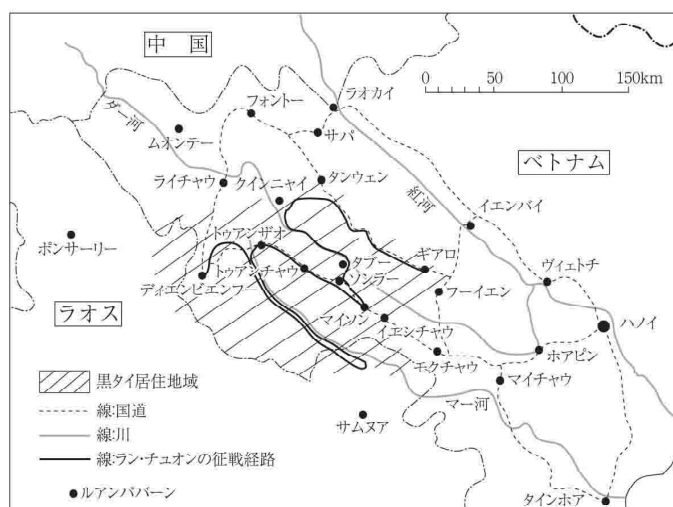
- 1) 総人口 7600 万人（1999 年）。公用語：ベトナム語
- 2) 南北に長く、国土の 70%以上が山地。北部は四季があり、中南部は乾季・雨期の二期。
- 3) 言語・文化・アイデンティティの点から、国家が 54 民族を公定。主要民族はキン（ヴィエト）族。人口の 86%。なお、ターイ（Thái）は 1999 年統計で人口約 120 万人。黒タイ、白タイをはじめとするサブグループに分かれる。
- 4) 伝統的には、紅河デルタ部、中南部海岸平野は、灌漑水稲耕作による生産力を背景に、東南アジア有数の人口稠密地域。この地域を中心に、10 世紀以前から漢字を受容、とくに 17 世紀以降、中国式の官僚制度、儒教道徳を受容した王朝国家を立てたのがキン族。
- 5) 山間部は、言語、生業、文化が異なる民族が居住。東北部、西北部、中部高原、メコンデルタで、居住する民族、民族間の歴史的関係、社会組織のあり方が異なる。
  - ・東北部（15 世紀以来、中越国境が明確化。ベトナム王朝の支配力強い。）
  - ・西北部（20 世紀に至るまで、ターイは中国、ベトナム、ラオスに多重帰属。ターイやムオン（Mường）の各首領が盆地ごとに統治。ベトナム王朝、中国、ラオスから半自律的）
  - ・中部高原（村落を越えた社会組織をもたない焼き畑主流の諸民族が、ベトナム・カンボジア各王朝からの自律を比較的維持）
  - ・メコンデルタ（カンボジア王国から 17 世紀以降に獲得。クメール人が多く、上座仏教徒。19 世紀の開拓期に中国人大量流入）

### 2. ベトナムにおける「民族」

ベトナムでは、「民族」は、法的な権利と結びついた住民分類のカテゴリー。すべてのベトナム国民は「国籍」の他に「民族籍」をもつ。「民族籍」とはベトナムが肯定している 54 民族のうち、どれに各公民が所属しているかを示すもので、各人の ID カードにも民族籍が記入されている。1950 年代後半以降、「諸民族の平等」を掲げるベトナム人共産主義者による民族識別によって、次第に確立されたものである [樫永 2004]。

---

<sup>1</sup> 樫永の著作、研究業績に関しては、以下ホームページをご覧ください。ブログなどにもリンクしていません。<http://www.minpaku.ac.jp/staff/kashinaga/>



### 3. 地域の概略

#### 3.1 ディエンビエンフー Dien Bien Phu

ベトナム西北部、ラオス国境に接するディエンビエン省（人口約44万）の省市。ハノイから西へ国道を約500kmに位置。ベトナム阮朝紹治帝が1841年に西方辺境防衛と開発の拠点として設置した奠辺府（ディエンビエンフー）に由来。18世紀のキン族（現ベトナムの多数民族）の記録にある「茫青（マントイン）」は、当地を水田開発してきた黒タイ族やラオ族による呼称ムアン・テーンへの当て字である。

メコン水系ズム川がなす山間盆地（標高約500m）にあり、南シナ海へと注ぐダー河、マー河上流部にも近接するため、雲南省、ルアンパバーン、ハノイからの交通・交易の要衝として栄えた。歴代ムアン・テーン首領はベトナムとラオス双方に朝貢していたため、19世紀後半にはフランスとシャム双方が主権を主張した。ラオ族最古の伝承集「クン・ブーロム年代記」によれば、ランサーン王国を14世紀頃に開いたファーグム王はムアン・テーン出身のクン・ブーロム、クン・ロー父子の血を引く。また黒タイ族の伝承では、始祖降臨の地ムアン・ロー（現ベトナム・イエンバイ省ギアロ）を去って各地を平らげた英雄ラン・チュアンが、最終的に安住したのがムアン・テーンである。ラン・チュアン居城に因む「ラン・チュアンの丘」こそ、第1次インドシナ戦争（1946-1954）最大かつ最後の「ディエンビエンフーの戦い」でフランスが完全降伏した要塞「A1の丘」。キン人の伝統的居住地域から遠く離れ、黒タイ族やモン（苗）族が多数派を占める当地での勝利は、ベトナム諸民族の団結を強く印象づけた。フランスを掃討したもの、引き続きジュネーヴ協定（1954）では東西冷戦を背景とした大国間の思惑によってベトナム民主共和国領は北緯17度以北に限定され、これが南北統一を掲げたベトナム戦争（-1975）への大きな一因となった。

1960年代以降のキン人入植者が今や多数を占める。山地と低地、少数民族とキン人の経済・教育格差是正のため、付近では急速にインフラ整備や経済開発が進んでいる[檜永 2008a:286]

### 3.2 西北地方の史的概要

#### 3.2.1 年代記からの前近代史：黒タイ中心史観

黒タイの祖先は中国雲南省ホン河源流域から下って最初にムオン・ロ (*mưông Lô*) すなわちギアロの盆地に定住した。その始祖がタオ・ガン公である。その長男タオ・ロはタオ・ガンを嗣いでムオン・ロを食邑したが、タオ・ロの七人息子の末子ラン・チュオン公にはタオ・ガンから相続できる土地がなかった。そこで何千何万という兵を引き連れ、新天地を求めてムオン・ロを去った。彼はサー (*Xá*) と総称される先住のモン・クメール系やカダイ系の諸民族を駆逐し黒タイ化しながら、クインニヤイ、ムオンブー、ソンラー、マイソン、トゥアンチャウ、トゥアンザオ、ディエンビエンを征服して黒タイの勢力範囲を広げた(だいたい11~12世紀頃 [Câm Trọng 1978 : 51-57])。12~13世紀には、タオ・チエウ公がディエンビエンを去ってライチャウを食邑した。それまでライチャウは、黒タイとは異なりシップソンパンナーから下った北部白タイの首領が食邑していたが、このときライチャウに黒タイの政治組織が持ち込まれた [Câm Trọng 1978 : 37]。同じ13世紀頃、ターイの政治的中心はディエンビエンからトゥアンチャウに移り、ロ・レット公、別名グー・ハウ公 (コブラ)、タ・カム公、タ・ガン公の三代にわたって、13~14世紀頃トゥアンチャウの全盛期をもたらす [Câm Trọng 1978 : 65-66]。十五世紀にはモクチャウの勢力が強くなり、首領サー・カ・サム (*Xa Khá Xăm*) が中国明朝からベトナム黎朝への侵略を後方支援する [Câm Trọng 1978 : 319]。17世紀になると、ブン・ファイン公 (Bun Phanh) のもとソンラーがターイの最大勢力となる。18世紀には、ホン河デルタでの農民反乱を煽動し、敗走したホアン・コン・チャットがターイ各首領を味方に付け、ディエンビエンに立てこもる [Câm Trọng 1978 : 333]。それからとくに19世紀以降は南中国からの匪賊流入に悩まされ、さらにはフランスの植民地支配を受けるようになった [檜永 2008b]。

#### 3.2.2 近代以降の史的概略

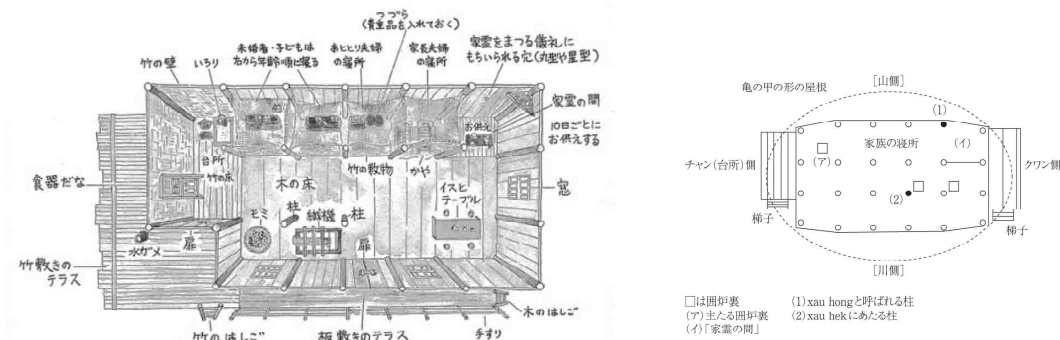
1897年7月26日附け王令で、トンキン諸州におけるフランス直接統治が始まる。

- 1908 ソンラー刑務所設立。
- 1909? タンウエンの白タイが、ソンラーから脱獄しフランス駐屯地などを襲撃
- 1917 フランスがソンラーに初等学校設立
- 1933 SonlaからLaichauの道路建設が完成。マイソン知州カム・オアイ死去
- 1940 救国ターイ同盟発足。「抗仏、排日、独立」のスローガンで、ソンラー刑務所獄中の党員の活動、脱獄を助ける。
- 1945 日本軍がソンラー統治。日本敗戦後ハノイで8月革命。8月29日ソンラー解放。ベトナム民主共和国独立宣言。
- 1946 インドシナ戦争。フランス再進駐
- 1952 ソンラー解放

- 1954 ディエンビエンフーの闘いでフランス撤退。(フランスによる植民地統治が終わる)
- 1955 ターイ・メオ自治区設置(1962年、「西北自治区」と改称)
- 1975 ベトナム戦争終結後、自治区解体。
- 1976 ベトナム社会主義共和国
- 1986 ドイモイ路線採択

### 3.3 ドイモイ以降の地域開発

- ・ダム建設：ソンダーダム：完成すれば東南アジア最大となる2400メガワットのダム建設を2002年以來、進めている。ダム完成時に水没する面積は275平方キロメートル。盆地での灌漑水稲耕作を主産業とするターイをはじめ、住民約10万人が移住を余儀なくされる。
- ・貧困撲滅プロジェクトの推進に各国際NGO団体も支援：植林、井戸開鑿、農業指導など



### 引用文献

#### Cầm Trọng

- 1978 *Người Thái ở Tây Bắc Việt Nam*, Hà Nội: Nhà xuất bản Khoa học xã hội. (『西北ベトナムのターイ』)

#### 樫永真佐夫

- 2004 「ベトナム—小中華の国家統合」青柳真智子編著『国勢調査の文化人類学—人種・民族分類の比較研究』古今書院、159-176頁
- 2008a 「ディエンビエンフー」桃木至朗、小川英文、クリスチャン・ダニエルス、深見純生、福岡まどか、見市建、柳沢雅之、吉村真子、渡辺佳成編『(新版) 東南アジアを知る事典』(石井米雄、高谷好一、立本成文、土屋健治、池端雪浦監修) 平凡社、286頁
- 2008b 「ヴェトナムにおける前近代ターイ研究について」塚田誠之編『民族表象のポリティクス—中国南部における人類学・歴史学的研究』風響社。63-88頁。